「全共闘三〇年　時代に反逆した者たちの証言」（実践社・一九九八年）

激動の六〇年代とマル戦派

成島忠夫（当時・三派全学連副委員長）

――成忠（なるちゅう）さんは静高から静大に行かれましたが、六〇年代のブント・社学同、特にマル戦派には静高出身者が多かったですね。

●静高社研の出身者では安保ブントの指導者で生田浩二さんがいて、安保の後にブント革通派の指導者になる服部（信司）さんがその三年くらい下かな。望月（彰）さんが服部氏と同期、その一年下が矢沢（国光）さん、またその下が成島道官さんと続いていく。ただし矢沢さんは社研じゃなかった。

一方、静大にも結構動員力を持つブント細胞があって、それとの連関もあった。吉川（駿）さんは第一次ブントの静大細胞だ。道官さんは私と同級で、彼は一年生のときから社研でやっていたし問題意識もあった。一、二年生のころは、まあ穏やかに読書会中心の活動だったけど、三年になると安保闘争が盛り上がってくる。六〇年の六・一五で樺美智子さんが殺されたときは、静岡市内で三〇〇人くらいでデモまで打った。道官さんは凄く有能だったね。学校当局の弾圧を乗

り越えてやったわけだし、アジテーションも凄かったし、人格的にも素晴らしかったと思うよ。我々の世代の後には、見崎（信儀）さんとか浜下（武志）さんとか、また錚々たる顔触れが続くわけだ。

六二年段階では、関西は京都府学連が残っていたけど、東京の社学同系では東大の佐竹（茂）さんや矢沢さん、望月さん、古賀（暹）さん、多田（康男）さん、今井（澄）さん、豊浦（清）さんといった人たちの運動と、それから静大の吉川さんや私たちの運動（静大社学同）と、大衆運動をやっていたのは殆どそれくらいしかなかったと思うよ。六二年の大管法闘争のころまでは東大の社学同は皆一緒にやっていたわけだ。大管法のころはしょっちゅう東京に出ていったんだけど、東大経友会のボックスに行くと、多田さんたちがいたな。

『経済評論』に岩田弘の「現代資本主義と国家独占資本主義」が掲載されたのが六二年六月だった。それまで服部さんはサラリーマンをやっていたけど、ちょうど鈴木鴻一郎を猛烈に勉強していたところで、岩田論文が出てから矢沢さんと道官さんが岩田さんを訪ねていったんだと思う。ここで、服部さんが望月さんや矢沢さん、成島道官さんらをオルグってマル戦派の原形のマルクス主義戦線委員会を作った。マルクス主義戦線委員会というのは政治同盟というよりフラクションに過ぎなかったけれど、ここで望月さんは古賀さんたちと一回袂を分かつ形になる。

当時の服部さんの問題意識は、第一次ブントの姫岡理論を乗り越えなくちゃならないということだったと聞いたことがあるけど、岩田経済学で姫岡理論を乗り越えることができるという確信を持てたことで、あの人はもう一回党派運動をやる気になったんだと思うよ。それで東大と静大

に拠点を作る。

道官さんも苦労して東大に行くわけだけど、学生運動をやるためには東大に入らなくちゃならないって使命感に燃えてたんだから、あいつはエラい（笑）。西部（邁）さん、佐竹さん、江田（五月）さんのあと、六三年の東C（東大教養学部）の委員長が道官さんだったと思うな。六四年に横須賀にポラリス潜水艦が来る。道官さんがフロント（社会主義学生戦線）と組んで民青を打破して、それでポラ潜闘争が出来るわけだ。

その後、六五年の駒場の自治会委員長を浜下さんがやって一定の勢力を確保する。あとは望月さんが学芸大に入り直して、他にも立正とかに基盤を作る。慶應は栗本（慎一郎）さんがいて、その二学年後輩が一昨年暮れになくなった坂ちゃん（故・坂内仁氏）だ。

静大のキャップの吉川さんが卒業して、東京で労働者運動をやるということで就職したのが確か六四年だったかな。共産主義者同盟マル戦派という「党」を作ったのがこの年だ。吉川さんと望月さんは気が合っていたからコンビで労働者部隊を作っていく。

中核派もそうだったけど、結局労働者部隊を作らなければ駄目だというのは当時の活動家の常識になっていたわけだ。一つは、六〇年安保の後に独立してやっていたいろんな労働者運動ともう一回連絡がついてきたということ、この点では望月さんの力が大きかったと思う。それを吉川さんが組織として作っていく。東京のいろんな労組の青年部、青婦部に足場を持ったわけだ。ただ実際には、望月さんは産別委員会を作ろうという発想だし、吉川さんは「職業革命家の党」ということで産別じゃなく地区組織で作っていくべきだといった具合に、二人の間に悩みも対立も

あったとは思うけどね。

六五年は日韓闘争の年だったよね。マル戦派は、海外進出は日帝の延命策、「弱い環」だからこれを叩くんだという理論を立てて日韓闘争に全力投球した。社学同系ではマル戦派が一番情熱を持って日韓闘争に取り組んだわけだ。事実上、日韓決戦論だもの。日本革命を突破口にして世界革命へという戦略がおぼろげに出てきたというのも、このころだと思う。六五年になって急速に活動家が出てきた。早稲田では見崎さん、松井（透）さんが中心になって、早大一文でストライキを打って物凄い動員力を示す。一文だけで社学同が三〇人くらいになっちゃった。

浜下さんも東Cのストライキで退学処分をくらうし、皆一年間学業も放り出して日韓闘争に集中していたわけで、考えてみれば、特に東大の活動家にはずいぶん負担をかけたと思う。ただ、東大の活動家には服部さんの人気がなくてね（笑）。合宿やっても東Cの活動家なんて出てこないんだ。

――東大は結局、道官さん、石田（寿一）さん、山崎（順一）さんの人望で持たせていたと。

●道官さんの人格と、石田さんの真面目さと、山崎さんの頭の良さという感じだよね。マル戦派の社学同全国委員長が石田さんだったのかな。あのころはマル学同とか解放（社青同解放派）とかを含めて石田さんのアジテーションが一番だった。

――ただ、日韓闘争が終わった後の反動もきつかった。

●それは来たね。物凄く来た。党派カードルになろうという者以外、本当にいっぱい活動家が離れていったよ。そう言えば、この年だと思うけど、いいだももさんたちと一緒に党を作ろうかっ

ていう話があったな。いいださんも岩田理論を評価していたからね。でも結局、いいださんたちは共労党（共産主義労働者党）を作るし、我々はブント統一委員会と合同して第二次ブントを結成することになるんだけど、何が一致しなかったのかな。もう覚えていないな。

全学連副委員長時代

――ところで関西ブントの人たちが東京に出てきたのはいつころからですか。

●早大学費闘争の時（一九六六年）に、塩見（孝也）さんが早稲田にオルグに入って、政経の村田（能則）さんとか一法の荒（岱介）さんとかをオルグしていたのは覚えているけどね。生協連に勤めるということで佐藤浩一氏はもっと早くから上京していた。次が渥美（文夫）さん、浦野さん、塩見さんあたりだよね。佐野（茂樹）氏はまだ関西にいたと思う。

関西ブントには第三期論というのがあったけど、日韓闘争で大衆運動が出来なかったということで破産したということになったわけだ。なんでマル戦派はあないに大衆運動が出来るんやということがあったはずだよ。当時、理論の優劣の基準というのは大衆運動が出来るかどうか、パトスが湧くかどうかということでしょう。

――一九六六年のブントの大合同のとき、成忠さんはどう感じていたんですか。

●これは言っちゃならないことだけど、不安だった（笑）。私は関西ブントとは一緒になってもいいと思っていたんだけど、東京の旧ＭＬなんかとは肌合いが違いすぎると感じていたんだよ。

日共港区委の委員長だった山崎衛さんもあの合同の最終局面で入ってきたわけだ。山崎さんは服部氏がオルグったんだけど、もともと良っちゃん（故・高橋良彦氏）の人脈かも知れないな。それとたぶん望月さんと古賀さんたちは、旧革通派同士、再建社学同同士の信頼関係が大きかったんだろうな。

関西ブントの人たちも、六六年ころまでは皆、大学を卒業したら普通に労働者になって労働運動をやるつもりでいたんだよ。それがマル戦派と一緒になって第二次ブントを結成したことで、刺戟を受けたんだな。マル戦派は「革命戦略」という視点を出して、危機論と革命の現実性という問題を結び付けていた。塩見さんなんかも、これはマル戦の功績だって評価していたんだよ。

それで関西ブントも単なる労働運動家じゃなくて「革命家になるんだ」って、びしっと背筋が通っちゃったんだ。だいたい私だって、道官さん、石田さん、山崎さんと四人で東京の学対をやっていたわけだけど、明大の「二・二協定」の後始末で全学連副委員長をやれっていう「赤紙」が来るまでは、もう大学を卒業して労働運動をやるつもりで就職先まで決まっていたんだよ。

――そこへ二・二問題が文字通り勃発した。ここから「我らが副委員長」の出番になるわけで、不眠不休で全国を走り回らなくちゃいけない。成忠さんの恐らく最も多忙な一年ということになったわけですね。

●第二次ブントから明大に派遣されていた学対が塩見さんと私だった。塩見さんははっきり言えば関西派の組織作りのために明大に張りついていたんだけど、二人で上原（康男）さんとか重信（房子）さんとか、二部の人たちを一部から分岐させた。まあ二部は最初から一部に対して、

ちょっと反発していたところがあったんだけどね。塩見さんは徹底抗戦論だしマル戦もそうでしょう、だから意気投合してやっていた。それで、私はまさかあんな問題が起こるとは思わないから二月二七日に結婚式を挙げることにしていたんだよ。

二月一一日に建国記念日反対の屋内集会があって、二月一九日に全学連の拡大中央委員会があって、明大闘争の後始末としてブントは全学連委員長のポストを中核派に引き渡す。

ここからは何よりもブント、社学同の名誉回復が絶対的な責務、プレッシャーになるわけだ。結婚式の前日の二・二六が砂川闘争で、結婚式の次の日が二・二協定粉砕の明大闘争、この日のデモ指揮で逮捕だ（笑）。既にもう名誉回復の闘いが始まっていたんだよ。

――明大闘争当時の『戦旗』の論調をなんとなく覚えているけど、「徹底抗戦」とか「内乱主義」とかの空語だけという印象があります。結局、明大社学同の現場活動家たちがそれにそっぽを向いてしまったというのが、二・二協定の一側面でしょう。

●マル戦は、革命のために学生運動を利用するという発想が露骨だった（笑）。そういうのと明大や中大の運動体質は違うんだよな。もっと余裕があるというか……。浅田光輝さんもマル戦の徹底抗戦論なんて莫迦げているって言っていた。ただ、ああいう形でぶざまに収めたことに問題がある。あれじゃ「暁の脱走」でしょう。二・二協定の当事者がトンコしちゃうわけだよ。もっと自信を持って、徹底抗戦論者の主張とは違って大学は「革命の工場」じゃないんだときっちり言って胸を張っていればよかったんだと思うね。実は第二次砂川闘争から秋の羽田闘争への流れの原点は二・二協定なんだよ。名誉回復せねばならないというプレッシャーが大きくて、秋の街

頭闘争もある意味ではそのライン上にあったわけだ。

もう一つ、明大の現場をああいう形で追い詰めてしまったあおりを翌年になってマル戦がかぶったのだとも思うね。二・二の後、ブントの内部でマル戦―関西のゆるやかな連合に対して旧ＭＬ・独立系が後退する。一年後、その旧ＭＬ・独立系と関西の連合軍にマル戦が第七回大会で敗北すると……。

たぶん、この背景には関西ブントの組織戦術があったわけだ。東京に出ようにも、マル戦派は岩田理論でがちがちに凝り固まっているし大衆運動もあって手強い、だから旧ＭＬ・独立と組んで作った統一委員会を足場にして東京に出てこようとしていた。ところが二・二問題が勃発する。塩見学対部長は私に全学連副委員長をやってくれと言って関西に引っ込んじゃう。学対部長の後釜は道官さんがやることになる。砂川闘争のときに塩見さんが「成忠、あとは頼むぞ」って言ったのを覚えているよ（笑）。それで、中核派の迫害（笑）をはねのけて、一〇・八、一一・一二までそれこそ必死になったわけだ。やがて中核派とのバランスも回復して、逆に信頼関係も生まれる。

二・二の時点では、信頼なんてないよ。そもそも彼らは六六年から、第二次ブントというのは全学連委員長を取るための野合でしかないって言っていた。二・二でそれを証明した形になっちゃったわけだからね。二・一九の全学連集会のときに中核派が角材を準備したという噂があって、山崎さんと私とでこっちも用意しようかって話し合ったのを覚えているけど、そういう緊張関係があったんだ。東工大でやった夏の全学連大会のときも、中核派が角材を準備しているって

情報があったな。このときは、こちらも完全にその気で乗り込んだけど。

羽田空港に進撃した日

――二・二六、五・二八、七・九と第二次砂川闘争があった。どれも全都レベルの大きくて激しい街頭闘争だったけど、あの過程で三派全学連の勢いも動員力も一気に増していきましたよね。

●自然発生的にだけど、五・二八で投石が出る。これも秋のゲバ棒闘争登場への伏線になる。あの日は、午前中に早稲田で革マル派とのゲバルトで投石戦をやって、午後は砂川で機動隊に投石した（笑）。五・二八も私が総指揮をやったんだよ。

――七・九では竹竿を使って機動隊の防石ネットを突破する「実験」をやったとも聞いていますけど。

●それは知らないなあ。でも、砂川というとまず『流血の砂川』（編注＝映画の題名）のイメージがあったでしょう。実力闘争だ。そして何と言っても現地の反対同盟が「この米侵略機をベトナムに送るな」というスローガンを掲げたことが大きかった。ここから本格的に、日本のベトナム戦争加担に対する大衆闘争が始まったわけだ。一〇・八だって一一・一二だって、ベトナム戦争加担を阻止しようと本当に思って闘ったその結果だよな。全学連からべ平連まで含めて、そういうことを考えて必死に闘った青年たちがいたんだということは歴史のなかに記録されるべきだと思うよ。

――七月に全学連大会があったわけですが、このときには秋にまで引き継がれる党派的対抗関係の基本構図はもう出来ていたわけですよね。

●一〇・八と一一・一二の羽田闘争につながる、ブント・解放・ＭＬ（社学同ＭＬ派）・第四インター（社青同国際主義派）というブロックと中核の対抗関係は、いちおう基本的には出来ていたね。正確には、ブント―解放というゆるやかな連合関係があって、そこにもう一つ、ブント―ＭＬ、第四インターという連合が合わさっていた。第四インターはすでにＯＬＡＳ路線を評価して、プロレタリア国際主義を掲げていたし、もう「武装」と言っていたかも知れない。ＭＬは文革で燃えていたしね。全学連大会のときにＭＬ派の畠山さんと第四インターの中沢さんと私の三人で、「秋は徹底的にやろうな」って固く約束したよ。それとね、六四年ころ、静大に、黒岩（卓夫）さんと、だいぶ前になくなった河北さんがＭＬ派のオルグに来たことがあるんだよ。それで喫茶店で、河北さんが私に「警察官を射てるか？」って言うんだよ。当時の静大社学同はどちらかというと「革命青年」というより「良心的インテリ」の集団だから、凄いこと言うもんだって思ったけど、彼らはそのころから「武装」という発想が明確にあったんだな。

それで一〇・八の佐藤訪ベト阻止闘争それ自体についてだけど、いくつかのファクターが絡んでいるんだ。九月に社学同の全国大会をやるんだけど、その月の『社学同通達』に「空港突入」という方針を出した。政治局もこの方針を追認するわけだ。実力闘争一般ではなく具体的に突入せねばならないということになると、戦術をきちんと考えなくてはならなくなる。それが一つ。

もう一つ、九月には二回くらい小さな羽田闘争をやっているんだけど、これが徹底的に機動隊にやられた。ぐしゃぐしゃにされて物凄い屈辱だったわけだ。これで正面から、つまり穴守橋や大鳥居駅、空港入口駅からデモで警備線を突破するというのは結局殆ど不可能だと思ったんだよ。それで大森海岸駅から鈴ヶ森ランプを駆け上がって高速道路から空港突入という奇襲的な戦術を考えついたわけだ。立正の誰かが持っていた車に乗って、私と山崎さんで鈴ヶ森ランプを下見に行って、よし大丈夫だということになった。

それで一〇・八当日は大森海岸駅で、いきなり皆を電車から下ろして、一気に突入させた。もう一方的だったよね。道の両側に機動隊がバタバタと倒れていたくらいだもの。四派の全学連部隊が高速道路に上っていったのを見届けてから、私は萩中公園で行われていた反戦青年委員会の集会に駆けつけて「今、全学連が空港に突入した」ってアジったわけだ。皆、いっぺんに空気入ったよ。実際には、高速道路に上ってから左と右を間違えて東京方面に突っ込んじゃったわけだから、後で中核派から「成忠は嘘をついた」って言われたけど（笑）。事前の下見をしていたのが道官さん、山崎さんと私だけだろ。だから先頭のやつが間違えたら、後もそれに続いてしまったということなんだよ。

――あの時はかなり行ったところで、ア、いけない、間違えたって気づいたんですよね。たしか、観光バスを止めて空港はどっちですかって聞いたら、何と空港は後ろの方だった（笑）。それで機動隊ともう一戦交えて高速道路から押し出されて、また電車に乗って大鳥居から穴守橋に向かったわけですね。

●もう一つのファクターが、一〇・八の前日に解放派の全学連書記長・高橋（幸吉）君や都学連の北村（行夫）君が法政で中核派に拉致されリンチを受けるという事件が起こったこと。全学連内部で中核対反中核連合という対抗関係がここで完全に鮮明になる。彼らを何としても救出しなくちゃならないということで、中大に集まっていた四派全員に角材を持たせて法政に押しかけた。これは衝突しに行ったわけじゃない。軍事的圧力をかけて、彼らを解放させようとしたわけだ。やるならやってやるぞという気はあったけどな。確かこの角材が翌日の一〇・八に流用されたわけだ。

――九月に砂川でマル戦系の学生細胞の合宿があって、秋はプラカードなり竹竿なり、とにかく武器を使うぞって話になったと聞いたこともありますけど。

●それは覚えてないなあ。七日～八日の角材は誰が準備していたのかな。思い出せないんだよ。鈴ヶ森からの突入という戦術は我々だけど、棒を実際に準備したのは、山崎さんでないとすれば、ひょっとしてML派あたりかもしれない。

――味岡（修）さんに聞いたんだけど、当日朝、棒を中大に忘れたまま出掛けちゃったんですよ（笑）。別の任務で中大にしばらく残っていた何人かが御茶ノ水駅まで部隊を追いかけて渡したんだそうです。

●中核派は萩中公園の反戦集会から出発して弁天橋で装甲車を占拠して闘い、山崎博昭君が虐殺される。鈴ヶ森ランプから転戦してきたブントは穴守橋で投石戦のあと装甲車を片端から燃やしてしまう。どうも発想が少し違った（笑）。それで一〇月一七日に山崎博昭君中央葬が日比谷野

音であるわけだけど、中核派が国民葬というのに対してブントは人民葬を対置した。はっきり言えば難癖をつけた（笑）。

当時の判断として、中核派は春の統一地方選挙で美濃部支持をうたって北小路敏を立候補させたように、新左翼の小さな基盤から離陸してもっと大きな国民運動的存在になろうと志向していた。それが折につけて出てくるのを、ブントは左から叩こうとしたということなんだ。だから、一一・一二の第二次羽田闘争で中核派はゲバ棒闘争をやらないかも知れないという観測もあったんだよ。たぶん中核派もブレていたんだ。王子野戦病院開設阻止闘争のときだって、角材について「プラカード保持の権利」なんて言ってたくらいで、中核派が明確に武装の論理を位置づけるのはだいぶ後の話だ。それが一一月に藤本（敏夫）さんや高原（浩之）さんたちが、関西では中核派がダンプで突っ込むなんて言ってる、俺らも相当気張らにゃあかん、と報せに来た。王子闘争の後に中核派は一〇月からの闘争を振り返って「激動の六か月」と言いだすんだけど、それが開始されたということだ。

我々の場合、一一・一二は最初からゲバ棒闘争だと決まっていた。だから最大の戦術問題は結集した何千もの部隊を、武装したままの状態でどうやって翌日まで保たせるかということだったわけだ。そこで、機動隊が入る寸前まで中大にいる、それで駒場祭をやっている最中の東Cに移す。駒場祭実行委員会はフロントが取っていたから、そことすぐ交渉する。それと佐藤首相の私邸が駒場の隣駅だから、陽動が効けば、警備の重点はそちらになる、何とか朝まで頑張れれば一般学生が登校してくるから機動隊も入って来れない、という読みで行ったわけだ。

――中大でも東Cでも、中核派は四派に置いてけぼりにされましたよね。ところで関西からの上京部隊はどうだったんですか。

●一〇・八にはあまり関西の部隊はいなかったけど、一一・一二には思い切り気合を入れて一杯出て来たね。一一・一二で駒場にバリケードを作ったのは関西ブントの人たちだ。彼らは動きが凄く組織立っているなという感じだったよ。

マル戦派対関西ブントの対立

――二つの羽田闘争を終えて一二月はじめにブントが品川公会堂で「羽田闘争報告集会」をやるでしょう。あそこで関西ブントから突如「組織された暴力とプロレタリア国際主義」という言葉が出てくる。私はこれじゃ当時の社青同国際主義派のスローガンと変わらんじゃないかと思ったけど、このころから第七回大会に向けてブント内部の対立関係が一気に噴き出してきた。

●関西の急進主義ね。山崎さんなんかはこうした急進主義的傾向に対して明確に否定的だったから、「実力闘争」という視点だった。ただ「武装闘争」という新しい視点に対置するのに旧態依然の「実力闘争」じゃ無理だったと思うよ。六八年一月のエンタープライズ闘争のとき、「無色透明な実力闘争」という迷言が出て、そんなんじゃ駄目だ、闘えない、関西にも反論できないって、東大の会議で川上（浩、故人）さんや清井（礼司）さんあたりが猛烈に突き上げていた。でも多分このころまでは、まだどうにでもなったんだ。とにかく一番決定的だったのはエンプラの

ときの東京の街頭闘争がしょぼいもので終わってしまったことだよ。

一月一七日の佐世保のゲバ棒を中核派の分まで含めて準備したのもブントだし、あの日先頭で突っ込んだのもブントだし、連日きっちり闘争していたことも、行った連中は皆分かっていたんだから、佐世保からブントが中核派より一日早く撤退したのが悪いなんてことは大したことじゃないんだ。ＰＢ（政治局）から佐世保に派遣されてきた現場責任者が新開（純也）氏で、学対が私で、二人で二〇日に撤退するって決めたと言っても、それは新開さんと服部氏が電話で連絡を取り合ってＰＢが了承していたことなんだし。私は佐世保で東京の外務省突入闘争とかのニュースを見て本当にがっくり来たよ。

『戦旗』の一月五日号一面に載せた私の論文では「革命的内乱」なんて書いたんだぜ。一一・一二の次の日の一般紙では「まるで暴動だ」なんて書かれたけど、エンプラの東京でも本当に暴動的な闘争をやるつもりだったんだもの。中核派は佐世保一点集中だ、でもブントは東京と佐世保の双方で目一杯やるぞ、というはずが不発に終わった。中核派はここで失地回復した。はっきり言って、東京に残ったブント学対は突き詰めてなかったんだよ。俺たちは佐世保で突き詰めてやったぞ。だって一一・一二のあとのエンタープライズ闘争だよ。いくら角材を準備していたって無色透明な実力闘争なんて話じゃ無理に決まっている。これが結局、ブント内部でマル戦派の責任だということになったんだと思うよ。各現場でも、ただの「実力闘争」じゃ駄目だという雰囲気だったろう。そういう時代になっていたんだ。

もう一つ、安保ブントがそうだけど、そもそもが世界革命とか国際主義とか暴力革命とかい

うのがブントの基本発想でしょう。関西ブントの国際主義と武装、同時革命というのもそういう流れを受け継いでいる。マル戦派はそういう点では異質だったんだよね。だからマル戦派の分裂後に従来の体質を受け継いだ「マル戦の主流」はやはり後の前衛派だよ。彼らは七〇年代、労組運動を中心とした一種サンディカリズム的な運動に行き着く。党組織を作るというような発想もあまりない。それに対して我々怒濤派（労働者共産主義委員会）とかＬ協（レーニン主義者協議会）は、マル戦派の理論体質を克服して第一次ブントをどう受け継ぐかと問題を立てていったわけだよな。

でも結局、エラそうにしていてもマル戦の最高幹部は岩田さんのエピゴーネンに過ぎないとバレてしまったということじゃないかな。六七年夏に服部さんが『共産主義』（第一〇号）に「階級形成論」を出して、「夜昼論」じゃないか（編注＝「昼は労働者、夜は市民」という理論ではないかという批判）と猛烈に攻撃される、それに対してろくな反論も出来ないわけでしょう。まず、あそこでメッキが剥がれたんだと思うな。あのとき高原さんが「政治党派の書記長は、哲学的なこと書いたらあかんのや、政治だけやっとればよろしい」って言ったのを覚えている（笑）。

――あの「階級形成論」は揚げ足の取りやすい論文というか、意識のなかにまた意識があって……というマンジュウとアンコみたいな理論で、マル戦のなかでも評判が悪かったですよね。

●あれで、マル戦はブントの中での理論的な権威性を失ってしまったんだ。党外の学者の言うことをオウム返ししとるだけやないかと見られてしまった。党外の学者の主張を繰り返しているのなんて革命党派の組織やない、ということになっちゃったんだよ。そういう批判が関西から出て

きたのに対してマル戦は答えきれずに皆消耗したわけだ。東大と早稲田の細胞は、それが契機で離れていってしまう。

――ブント七回大会直後のマル戦派の学細代（学生細胞代表者会議）で東大の川上さんと早大の松井さんが、岩田さんの名前を出さないで「党外学者が」という言い方をしながら服部さんを猛然と追及していたことを覚えています。

●マル戦派の分裂後にL協になる人たちはそうだったよね。

――ところで佐世保のエンプラ闘争では生木を伐って角材を作ったとかという話を聞いていますが……。

●九州のあのへんの山が実家だという活動家がいるってことを望月さんが知っていて、その人と連絡を取って山の木を伐って準備した。それを梱包して鳥栖の駅に隠しておいて、急行の三分間の停車時間中に運び込んだわけだ。当時、中核派は「ブントは唯武器主義だ」という批判をしていたし、中核派があの日、棒を準備していないってことは分かっていた。それで秋山（勝行、全学連委員長）さんに、残りの棒は置いていくからよかったら使ってくれって言ったんだよ。じゃあ、あの日、中核派があらかじめ何を準備していたかというと肉弾の特攻隊なんだな。何人かが金網に取りついて基地に突入したのを見て、ああそういうことだったのかと思った。

――聞いていると、あのころの街頭闘争を実際に取り仕切っていたのは学対数人を中心にして各大学細胞の指導部だけだという気がしてきますね。

●そうなんだよ。中核派は現場に政治局員が出てきていたよ。ブントでPBクラスが学生の現場

に出てきたというのは、一一・一二に佐野さんが私にもやらせてくれって来たくらいだ。だからPBに対する信頼感がなかったね。マル戦派の分裂が、旧PB主体の前衛派、労対・学対主体の怒濤派、学生細胞指導部主体のL協という形になった遠因はここにあるんじゃないかな。

痛恨のブント第七回大会

――エンプラの後あたりから、マル戦対関西というブント内部の対立が殴り合いまで伴って一気に激化しつつ、三月末の七回大会に行くわけですね。

●七回大会には私は痛恨の念を持っているよ。それまで何年も懸け営々として築き上げたものの全てを一瞬にして失ったんだから。人生の勝負を懸けた仕事だったのに、決定的なところで私は一回だけ判断を根本的に間違えた。未熟だったんだよなあ。無念だよ。PBでは特に吉川さんなんか本当に残念だったろうと思うね。ブント大会二日目に欠席したということ、これは責任ある革命家の組織のやることじゃないよ。たぶん岩田さんの判断に服部氏が乗ったのが真相だと思うけど、大会に出て採決で負けたとしてもそんなの別にいいじゃない。私は、信義を、「紳士の約束」を、最初に破ったのは明らかにマル戦派の側だと思うよ。マル戦派がいなくなることで、残ったブントの連中にだって重荷をかけたわけだ。それで関西は小ブル急進主義だなんて言ったって駄目だよ。

あと、マル戦は心が狭かったな、はっきり言って。服部氏が典型だけどエリート主義で他のブ

ントを見下しているところがあった。牛乳労組なんかの中小の争議に対しても、労組青年部で正統的な労働運動をやっているマル戦の連中は「あんなのと一緒にされたくない」とか言っていたしね。

――歴史に「もしも……」はないといいますけど、吉川さんと成忠さん、山崎さん、石田さんが、あそこで反乱を起こして大会に出ると言った場合、それが通ったような気もします。少なくとも、後の怒濤派やL協になる連中、つまりマル戦の三分の二はついていったと思うな。そうすれば、第二次ブント最初の大分裂は、あのような形にはならなかったはずです。

●本当にもっと考えるべきだった。未熟だったよな。吉川さんも凄く悔いていると思うよ。きっと最大の悔いじゃないかな、私はそう思う。だから、お互い触れたくないし、私は怒濤派で吉川氏とずっと一緒にやるんだけど、そのことで話したことはないんだよ。ただね、関西もよくなかったんだ。吉川も成忠も一緒にやろうぜっていう愛情のある言葉はなかったよ。七回大会直前のころ、あんなに無茶苦茶攻撃されるのって心外だったもの。本当に無茶苦茶だったものな（苦笑）。佐世保だって、関西ブントの新開氏と私とで決めてやったんだよ。それを塩見さんのグループから、成忠、お前が勝手にやったのが悪いってやられた。なんでそんなこと言うんだよって、悲しかったな。現場で一緒に苦労した人間が難癖付けるのならまだいい。でも砂川で「成忠、あとは頼むぞ」って言って、それからいなくなってたやつに、なんで言われなくちゃならないんだ、私はこの一年間死に物狂いで苦労したんだぞって思ったもの。

まあ塩見さんとは最終的に借りもない貸しもないって思っているから、とっくに私は許している

るし、きびしく、やさしく付き合っていきたいとは思っているけどね。最後に言っておきたいんだけど、やったことはやったことだから、こういう風に話してもいいけど、歴史的評価とか反省とかとは全然別だということだ。それはまた別の機会に話そう。（聞き手　府川充男）

【なるしま・ただお】一九四二年生まれ。社会評論家。著述業。副業として不動産取引業。国会議員候補者。